

## オルドス「大元加封詔」碑について

楊 海 英

### 一、はじめに

1992年4月中旬、内モンゴル自治区オルドス地域で調査していた私は、エジン・ホロー旗（元ジュンワン旗）にあるチンギス・ハーンの祭殿八白宮（*Naiman Gayan Ordun*）の近くにある石碑をみることができた。

石碑は八白宮の主殿がある陵園の南、観光客相手の店がたちならぶ参拝道の西側に立つ。

八白宮の祭祀者ダルハト（*Dargad*）の話によると、当碑はもともとウラーンチャブ盟四子王旗（*Dörbed Vang-un Qosiyu*）にあったが、1936年から翌1937年に運ばれてきたものであるという。西進をつづけていた日本軍の手に落ちることを恐れ、黄河を西へ渡って移動させたというわけである。

当時の内モンゴルでは、徳王ことテムチュクドールプが日本軍と協力し、蒙古自治運動を展開していた。徳王の政治意志を異として、オルドス、寧夏へ流れる者も多かった。そのためオルドスに来た内モンゴル東部出身の人たちは、主とし

てジャサク旗政府所在地「盟政会」(Jasay-un gotoyun)、ジュンワン旗あたりに集まっていた。ジャサク旗旗長はイケ・ジヨ盟盟長、チンギス・ハーン祭祀の最高監督ジノンも兼ねていた。内モンゴル東部出身の流亡者たちは、八白宮に精神的支えを求めていたのである。石碑の西遷はおそらく、このような東部出身者の移動と無関係ではないだろうが、具体的にいかなる人物が中心になっていたかなどの情報は、入手できなかった。

日本にもどつてからは文献にあたり、モンゴル文化史を専門とする松川節博士に教示していただいたところ、この碑に関する研究は意外とおこなわれていないのではないかと、この判断に至った。そこで、あえて資料として発表することにした。

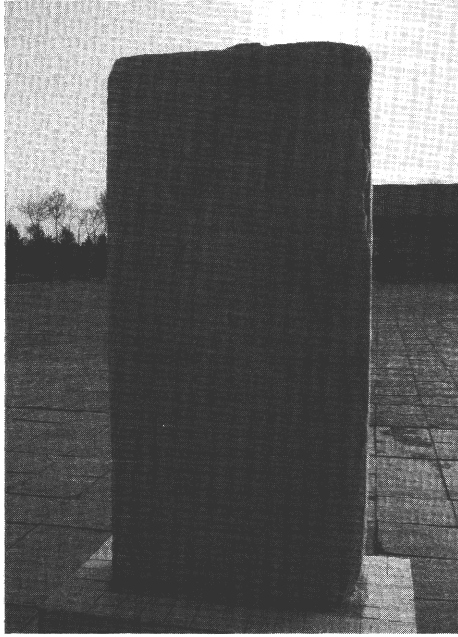
## 二、不完全な碑文

花崗岩からなる石碑は、高さ161cm、幅79cm、厚さ22cm。本来立っていた場所には亀趺もあつただろうが、現在地には亀趺はなく、白い建築材のうえにセメントで固定されている。漢文面が南東に向いている。この漢文面の右下と左下は破損している。左下の破損した部分のうえに「大徳」という年号があり、「大徳×月×日」とあるべき部分が壊れおちたこととなる。

左下の破損部分に以下のような〴〵行の漢字がある。

此石自四子部落移置為山右金石証所不藏大徳為元

成宗年號(距〴〵)今約六百歳矣□定陽張志潭記



この張志潭たる人物は漢名をもつモンゴル人なのか、それとも漢人なのか私は確認できなかつた。張志潭はこの碑は、「金石証所不蔵」、つまり石刻書の類にも収録されていないという。いわゆる「山右」とは、たぶん「陰山の右」を意味しているであろう。四子王旗は、陰山の左、オルドスはその右に位置する。

現在の漢文面の裏に本来いかなる種類の文字が刻まれていたか、確かめようがない。現状では、右上にところどころい行ほどの漢字がうつつすらとみえている。具体的には以下の文字が確認できる。

.....西.....  
 .....  
 .....  
 聖祖.....  
 .....  
 .....封天子.....  
 .....  
 大成至.....  
 .....  
 .....工.....九

政權交代の度に、先の王朝の碑文を削って、自らを正統化する文章を刻みこむことは、中国では珍しいことではない。とくに明朝の漢族文人たちは、モンゴルの元朝時代の碑文を抹消することに熱心であったかもしれない。漢文面の裏は本来パスパ文字モンゴル語あるいはパスパ文字漢文であった可能性も否定できない。

### 三、加封碑の背景

当碑はいわゆる「加封孔子制詔碑」のたぐいに入るものである。大徳とは元の成宗テムルの年号である。テムルは最初元貞を年号とし、軍功慶事のあった1297年陰曆2月に大徳に途中改元している（杉山 1996: 162）。成宗テムルは大徳十一年（1307）春正月に病死し、5月21日にカイシャン（海山）が上都で即位、武宗皇帝となる（宋濂 1976: 472; 477-479）。先帝が死んだとはいえ、年がかわるまで年号は継続され、カイシャン即位後の翌年正月から至大年間が始まった。『元史・本紀・武宗一』では、「（大徳十一年七月）、辛巳、加封至聖文宣王為大成至聖文宣王」とある（宋濂 1976: 484）。

杉山正明は、大阪外国語大学にある石濱文庫（石濱純太郎）所蔵の碑陰のみの拓本について言及した際、次のように分析している。「石濱文庫の拓本は、大徳十一年（1307）に武宗カイシャン Qaisan が閣復に起草せしめ、その漢字音をパスパ文字で写して中国全土に頒布した《加封孔子制詔碑》の碑陰であった。この詔は曲阜孔子廟の大成門前に現存する漢字とその音を表すパスパ文字との逐字併記の有名な巨碑をはじめ、相当数の碑刻が中国各地の孔子廟に現存し、また各種の石刻書に膨大な移録ないし著録がある。それらのあるものは漢字・パスパ字の並刻・合刻であり、あるものは漢字のみ刻される」という（杉山 1990: 11-12）。

杉山はさらに別の著作で武宗カイシャンをとりあげ、次のように論じている。カイシャンは全モンゴルの支持を得て大

ハーンになった人気者であった。かれはその人気に応えようと、即位後に莫大な額の褒賞・賜与をモンゴル全域に向けて乱発した(杉山 1996: 174-183)。孔子加封もそうした政權運営の一環として実行されたものであろう。

#### 四、内モンゴルにおける他の加封碑

以上、現在オールドス地域にある大徳年間の加封孔子制詔碑について述べたが、次に内モンゴル自治区内にある他の諸碑についての情報を整理してみる。

1986年4月27日から同年6月16日にかけて、茨城県立歴史館で「チンギス・ハーンとその末裔たち」と題する内モンゴル博物館の文物展がおこなわれた。このとき展示された文物のなかに、「大徳尊孔碑」(No.260)という拓本の複製があった。展示カタログでは「内蒙古博物館所蔵、大徳年間に製造された孔子廟を祭る碑」としており、大きさは212cm×85cmである(茨城県立歴史博物館 1986: 22)。写真をみるかぎり、碑文は右がパスパ文字で、左に漢文が刻みこまれている。漢文の内容はオールドス所存の「大元加封詔碑」とまったく同じである。ただし、どこの碑からとった拓本かなどの情報はない。蓋山林の『陰山汪古』のなかにも「加封碑」の情報がある。

蓋山林は、今のチャハル右翼前旗バヤンタラ郷土城子村北にある古城を元代の集寧路故城と断定している。その証拠として古城の内城から発見された「文宣王廟学碑」をあげている。蓋山林によると、この碑には「大徳十一年加封孔子制詔(碑)」とあり、碑にはさらに「至大三年正月趙王鈞旨出帑幣：建成大成至聖文宣王廟学碑……宣受集寧等処前民匠総管府達魯花赤陳、断事官完、集寧総管府達魯花赤奚刺耳……皇慶元年春正月雲中檢司提石匠宋徳禎魯男宋玉金鑄」と刻まれているという(蓋山林 1992: 110)。碑文全体が伝えられてないのは、残念である。

四子王旗烏蘭花鎮の西北約25キロの城卜子村にも古城があり、1959年に城内西南隅から文廟儒学碑が発見された。高さ175cmの碑陽に「大徳十一年加封孔子制詔」、碑陰には「淨州路總管府、大徳十一年七月立」とある。蓋山林はこれにもとづいて同古城を元代淨州路故城としている(蓋山林 1992: 113-114)。

蓋山林は、いわゆる「淨州路」の加封孔子制詔碑は、中華人民共和国成立以前にフフホトへ運ばれ、現在内モンゴル博物館に所蔵されているという(蓋山林 1992: 113)。これは先に述べた1959年の発見とは矛盾しており、真相は分からない。1999年2月に内モンゴル自治区赤峰地区で調査したところ(团长・松原正毅国立民族学博物館教授)、現地の研究者から、ケシクテン旗元代魯王城からも加封孔子碑が発見されたとの情報を得た。『赤峰市誌(下)』によると、いわゆる元魯王城は、ケシクテン旗内ダライ・ノール湖の西南2キロのところに位置し、元代の応昌路故址であるとしている(赤峰市地方誌編纂委員会 1996: 2767-2768)。

以上の諸資料に依拠すれば、オールドスの「大元加封詔」碑も大徳十一年のものであると類推できよう。

### 【参考文献】

- 赤峰市地方誌編纂委員会 1996 『赤峰市誌』(下) 内蒙古人民出版社。
- 蓋山林 1992 『陰山汪古』 内蒙古人民出版社。
- 茨城県立歴史博物館 1996 『チンギス・ハーンとその未裔たち』
- 宋濂等撰 1976 『元史』(第二冊) 中華書局。
- 杉山正明 1990 「元代蒙漢合璧命令文の研究」(一) 『外国学研究』XXI、pp.31. 神戸市外国語大学外国学研究所。
- 1996 『モンゴル帝国の興亡』(下) 講談社。



大元加封詔

上天眷命  
皇帝聖旨

蓋聞先孔子而聖者非孔子無以明後孔子而聖者非孔子  
無以法所謂祖述堯舜憲章文武儀範百王師表萬世者也  
朕纂成丕緒敬仰休風循治古之良規舉追封之盛典加號  
大成至聖文宣王遣使闕里祀以太牢於戲父子之親君臣  
之義永惟聖教之尊天地之大日月之明奚罄名言之妙尚  
資神化祚我  
皇元主者施行

大德（欠）

此石自四子部落移置為山右金石証所不載大德為元  
成宗年號□今約六百歲矣□定陽張志潭記